

にいがた

北から南から



ねこ騒動

坂井希美子

ある朝、夜勤明けのはずの息子から電話がかかってきた。

「あー、赤ん坊を拾って、今病院に預けてきたんだけど」。出だしの一言を聞いた私の頭の中は真っ白。「一体どういうことだろう」

「猫の子なんだけどね」なーんだ、先にそれを言えよ。彼の話を要約するとかいうことになるとなる。

早朝の繁華街、植え込みの中から「にゃー」という声が、よく見ると胎盤がついた状態の生後間もない猫の子が、土まみれになって啼いている。母猫が産みっぱなしでどこかへ行っちゃったらしい。拾い上げた息子は、動物

病院につれて行った。獣医先生がきれいに洗ってへその緒を切って、ミルクをやったら、元気回復。とはいっても、まだ目も開いていない。3時間ごとにミルクをやり、世話をしなくてはならない。我が家ではとても無理。里親探しは難航している。先生は「乗りかかった舟だから最後まで面倒みるよ」治療じゃないからお金はいらない」と言ってくれているらしい。

「自分で人生（猫生？）を切り開いてくタイブだ」「足が大きいからきつと大きい猫になる」など、時々「面会」に行く息子と、先生の会話の様子を聞くとほほえましくなる。猫であつても子供を育てているということ、こうして人の心をつなぎつけ豊かにしていくのだろうか？

このお人良しが私の長男、きちんと働いているのに収入は少ない。願わくば安定した職業と、心やさしいお嫁さんが天から与えられるよう祈っている毎日である。

長女は東京にいる。就職超氷河期と言われ



た時代に、果敢に就職活動をしてシステムエンジニアになった。たまに帰って来て話してくれる就職活動の話や、ＩＴ業界の話にはびっくりさせられる。新聞に書いてあることは本当だったのかと妙な感心しながら聞いている。それにも増して感動的なのは、わが娘の「たくましさ」である。今は仕事で面白くて仕方ないのだろうけど、体だけは大切にね。そして二男が今年就職した。この子もいろんなことをやってくれたのだが、私たち夫婦は、一応肩の荷が下りた気持ちだ。

実はこの３人、すべて中学時代に不登校になり、新潟市内の単位制高校に進み、大学に進学した。忙しすぎる親に育てられ気の毒なことをしたと思わないわけでもない。でも三者三様、しっかり生きていくことは何より嬉しい。先生方には深く感謝したい。

３人を育ててみて思うことは「やっぱり子育ては面白い」そして安心して生み育てられる社会を、皆様と力を合わせて作りたいと強く願う。（さかい きみこ・新潟県医労執行委員長）

専修学校から見た 高校教育の現状

三ツ井富士夫

知人の専修学校長から昨年、四月に入ってから急に「物理概論」の講師を頼まれ、多少の好奇心もあり引き受けることになり、惑いながらも一年が過ぎた。

私のかかわる学生達はほんの一部に過ぎないが、これまでの多くの高卒生を専修学校に送り出して来たこととあわせて、専修学校から見た高校教育の問題点、あるいは自らの反省を課題提起的に述べてみたいと思う。

以前にこの『教育情報』（二〇〇五・三発行八一号）で報告したように、本県の専修学校への進学率は全国一位で、高卒生のおよそ三〇％である。一部の有識者や県教委（あるい